日本歳時記

三

839
7
87

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

839
7
87

日本歳時記 七月 七

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

二月

[illegible]と云中と書とも云○二月の異名 仲春 [illegible]
[illegible]と云○二月の[illegible]と云[illegible]

[illegible]ふと[illegible]と[illegible]
[illegible]物は見えず

朝日 中和節とも

二日 今日を[illegible]といひ[illegible]

○孟子乃[illegible]
[illegible]
今の二月二日なり

○國俗奴婢を[illegible]
[illegible]朝[illegible]
[illegible]年二月二日まで
[illegible]三月廿日より九月廿日まで
[illegible]年
[illegible]奴婢[illegible]財とかりて年数久

[illegible]偉考によるに[illegible]定王
三十七年四月二百孟子[illegible]

曹山文庫

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』　請求記号 839-87

ガラス使用

たく所の元奴婢と教へたる稚児がちよのを拾べらす又才覚なるものとあれどらよ妙べらん賢家にて才あるものをいさつやてまれなる事にたゝ繁家なるものと稚くゝ（臘化ろいと買奴僕必粗養者多なる徐家者）奴才なりて使令なんよ如ひとるもよいの多くい姫曲ありまるて乃なる後よ上手のるよりお多人とつてとゝるもはさるり又地面巴い雑奴を使べらん下婢乃るの年久しもはくべうるず事とだてんはとうりたどりてあやまち多きものあり御紀と一年と定めりそのくん所ぬを表年を使ゝ

八月　釈迦仏乃生日なり仏祖統紀ハ周昭王二十四年四月八日釈迦仏生とあり但周ハ夏の月なれ四月とをれば四月ハ今乃二月ハ南至り深層氏かゝ事と考ゝて夏西の月をもちゆいなのやまつまりと古人乃称ふ丸えゝり

十五日　提要録ハ今日を地獄いふ乃説事なり

百花繚乱　野くゝかなれば色紙短冊とゝ

こゝろなり八月中ハ秋の真中なる八月名

ゝ号して月を賞するゝゝとゝり

○仏説ハ今日釈迦入滅の日にて涅槃会とも

考れば二月建と考へやまれり梅もろ小枝桃
桜は関れ穀雨五月十二年二月十五日佛涅槃すと記
せり月の二月は今は十二月なり考るに今十二月
十五日と云ふ佛涅槃ふまし
十八日 孔子の卒し給ふの日なり 孔子の卒の日は法師まち
これは孔子五十代の後孔子の法なり くらして一酒しがくし
二十八九日 此時文義と四節を揃へ めでたい祝て
ふへし上巳の菓子とも有なり 東地は五人会
農業を始まるへし
時日沐浴

春分の日春の中さひ〳〵ふ門なり寒暖とも
なれども春は春なれども日は出るまで二分半と
日入る前まで二分半と晴中
春は属ひとしくなれども明るくなること昼に
なれば日春ひとし〳〵ふ河とそこと春より日長
多くなる一湯まで後して湯屋出し日とすぐく
なりくるまでかよりて日春ひとし〳〵ふ
春分の日考妣先祖と祭るへし元人家中なるもと
考妣先祖神をまつるへし考妣といふ世の母
といふ先祖い祖父祖母より上とい先祖のひとく

ゆゑ〳〵いたく考妣とまつる法云い男組より出ると
ものゝ様子い男組より出ると思ひ〳〵ものゝ
様子とはなすいもとゆゑ乃義なり父母先祖
を我身の根本なり三つ〳〵の事様よ考妣して
供とゝくこれとゝ思ふを遠ゝと遠ゝ心地ゝ日一年
よ六日ゝ日ゝ四月ゝ日ゝ月ゝ日ゝ月ゝ日ゝ

いたり〜い　如説修行菓子　棚延より年玉に二
度たる事寡　孔子と寄る年を経て二月と八月の
上の丁日　如説修行日　釋尊誕生　彩年のまつりなど
ゆるされば中の丁よりあり　但大学寮より孔子祭び
十哲と寄る　法園寺　先聖文宣王　先師鄭玄と
寄る　左宰府　大学　先聖先師　民を驚かせまつる
延喜式よりこれ事　文武天皇大宝元年二
月より　彼日年紀　陵　苑　院　寛
西年中まで　粉菓　乃　雅楽　乃　大
孔の後　此　絹　綿　やはり　なるに事　寄る

俗　元　聖人　上一人より下　義民　より　まて　天下
万世　氏　師　なり　ば　朝　なり　寄る　事　也
新菓乃礼式　延喜式
法華経　事　寄る　俗
春分　秋分　乃　初日より　三日　あり　日　と　始て　後
七日　と　佛氏　名づ　く　彼岸　と　又　彼岸　乃　第四日
を　中日　と　名　ぶ　事　又　時　を　いつる　より　出　七日　の　間　也
俗　寄る　より　佛　小　俗　佛　也　唱　す　又　俗　法　師　号　演
説　法　と　なし　これ　と　彼岸　寄る　と　云　塞　物　る　屋
秘　新　等　不　て　め　法　二　十　女　岸　と　云
又　日　出　日　没　乃　方　岸　彼　岸　と　彼　岸　と　ひ　〜　さ　寄　彼　岸　と

かくなり山伏のごとくなる事ども多くあり
事と見り去る五いあれども山伏はかぶりて法螺吹
とかく又修験者ども法螺を吹くべきこと
相違なり山伏は法螺の貝を吹くべきこと
引て和尚天乃例を重ねあり菩薩の法と
小乗ひとしく七日七夜ものいはず斎戒して
醍醐寺開祖聖宝僧正遺集に七日の間世間の美人
人乃名と色欲を生死彼岸涅槃彼岸放日宣取二七日
修善業いとゆる書物七日ものいはず
もや祇平石乃縁より彼者乃日本乃風俗あり

去る五月十二日去りいらいとれたる歟 国史
源房氏乃名世乃事ふるく中毒天皇すいなる紀事
なるべし好古これとをきり彼岸乃事と書たる天氏
強記と云書一巻行りこれ天皇氏於樹菩薩乃作て
修験よれそやしゆれそと修書あり歟 国史修の作り
てかくひとりなるべし又見聞抄をてひ
くん此事とこりくきくこと書行りこれ強記事
のことをきり多く仏書と引作れそ弱そ
書よいる紀ものもと見り世信これ書と作ずべし
も作りまい社日ちく春秋に二度社と神と祭るなり

土をよく方相と書ひる穀と書ひる故よりの事の農事はよろうとのり秋いろは悪と報ずるを
とるんその日い至る乃後宋の成代りを書社と
ちはれ後宋の成代りと神社とる十干の干成己の土なり
あるよ書始るふ成の
日と用る 稚紀ふを仲春擇元日命民社とくるり元日ハ吉日のこと
風信通よいとく書工れるを修しふ書遊とを
舟車乃ものとろ是故代とを寒酒ずし
いふ事ふ〜あるよ紀て社祀とす左傳よいとく書土
民ふ行り句龍氏といふ草水土あふ紀ていとく社
稚紀郊特牲小厲氏乃ふ下とたるの時ろ代ふと

農といふよく百穀をとるの夏代襲るよ及ふく周乃
業継ぐあるよ紀ふくいて稷とす書立氏の九州て
霸ふ時そのふと后土といふよく九州と平ぐあるよ
紀ていふく社とすといふ 蔡邕ふくく業百穀と樹植る稷ふ百穀乃ものあるよ稷とふく
るれ社を土祀ふ稷祀ふり土穀
乃祀と書るるふ人民と書ひする有ものを乃
らいふく社日ふい村民たぐひよ来待て酒食よ
酸飽と祀と乃えるり張演り社日乃待ふを家ふく扶
隣人一帰と化ものるふ酒よく尊と治む
有よ治尊酒ふくとづくと海獺祭事よりてるりまる

蓮の実 秋はじめ花咲 月令廣義に曰
実分い湯氣の厚うやく發くてはぜひらひ
なり有よまこもの芽よ入し後ちやく法菜誌に嫩と
下注し茎のたねとうゆよまこもと移とるるを
面〜をひるり〜て彼岸迄拔て絲とまくとりの
多民い世むるよたとと去秋ましろくのうらいとくちち
とし実分を法湯日移れひとし〜ふ洗ひて一年の
大節ある事と考ふ又瓜花菜乃蔓とう
ち枝〜切のうしに付きねとまた根をとりちうの
角ふさるのい甜瓜 菜瓜 茄 壺蘆 冬瓜 絲瓜 胡瓜 芋 牛蒡

櫻 櫻草 地膚 美蓮 蘘荷 蓼 椒 木綿 巡 蘿蔔 百合 蓼
紫蘇 萬苣 甘草 牛蒡 雞冠花 唐朱紅 萱草根 葵
芍藥 又凡藥草花芽乃根ととりちうゆうよ三三
月より但牡丹芍藥ふもまうゆうよ絲ちうす又洗
月樹木とうつ〜植〜ハ根をとはよりひ月い樹とうい
ろ中洗ひ〜ち考ふ又凡樹木と接〜梨と接
ふもまこ乃お十日と用ひ柳と接ふい実分の後十月
と見〜と月令廣義に曰ふ又ふそく二月の頃ふ
ほとき苗乃木枝と挿ます又二月上旬よ法杉果
本乃枝と芋う蕷蔔う蕷にて地よ埋めまとと

うゆるふまされり又いそく七月法果本に培へし
七月法華根を採くし牧しめ沈麻中に浸て
そく古法苗を採るよ多く二月八月と用ひこれ
苗よりまさ勝れり但二月い苗に茅し八月ハ苗ゆ
根ど成ることなるよ紀ましく知りやとなれと茅よ生ていまぐ
良用しとせり大率根と用ひ初て宿根ハ苗を用ひ初
附ることなし津澤ましの根よ用ひてハ生べからこれと
餓人と甘りぐ蓋蔬地黄ましとれとよ苗多紀附ましれば
実して沈なり苗ハ附と生べ麻ましの宿
根ましおもとれましら苗

此月日を撰び灸治をなし一百餘の人を二月の月
八月十一月より灸をして瀉をなすべし
一此月三里絡骨より七壯灸して毒氣と成女に
灸をなすべし脚氣衝心の病あり
一此月人形をこしらへて年月日時を
瀉して禁灸の日あり先素問靈樞
乃ち灸ずるなり
一此世間者の後先を思ひ作ることに足
ずたゞ四季の所を云いたの紙より灸い勝り
あり然るに大氏紙よりあり
同乃ち灸をなすべしなり瀉
鍼灸聚英の記せり

又此月毎日陽と陰と相交ること二百餘度
中に霊知ること有と雖乃ち
月令廣義に見てり
天寧和曆の付録外山師より拙歌して無氣と解
曰く
先ず乃ち陽より陰に陰より陽
男女媒氏の陽より陰交に婚姻順天時也
此月は男女婚姻乳を結ぶ宜き月なり
此月遷と食いに大に益あり千金方に見えたり鬼と食
いに鍼と傷る雖ども
英華菜及源麦と

くゝ人は癇疾と云て梨子を食すれば大禁と食
へゝ人をして気あらさぐゝむ小豆粥とくゝい人の
志賀とやはり穀雨と食すると云又清水の流泉
を飲てこれを瘧瘴と云月令廣義書者
二月乃古候第一桃始笑第二倉庚鳴第三鷹化為
鳩右春雨乃三候なり第四玄鳥至第五雷
乃発声右始電右春分の三候なり
春雨は晝四十七刻夜十分春分
昼夜平刻夜平刻月令廣義

三月節と云中と云○三月の異名 弥生 寅月
雛祭 桃と姫沈と云○三月の和名と云奥後
にいとく風気はくゝまりて
少よりやゝひ月と云と家ゝ
二日 沐浴 艾餅と云
三日 今日を重三と云又上巳と云也
いにしへは三月初の巳の日を上巳と云今は三月を
辰の月を上巳と云日 花祭 を設
流水の宋書に魏の陳三日を用ゝ己の日を
拘りなしと云りけるゝ今日艾餅を食ゝ桃花酒と
乃を艾餅と称風俗と云ゝ
今日艾餅と云ゝと考ゝに新撰年代記に

三月二日冐麺乃汁と云て鶏と合せ粉を和す
名付て鶏春粉 音機来 俗云 といふこれを食すれば厭
離とも云ふ世ふ又東京の冐麺河中山城屋歴
時年去数歌雑来粉合和なりとかつこれとて
又豆腐ともこれを冐麺と用ふ云てより又
文政天保年中より国々より作り始め世に
名づく二月より始て蕨餅を作り三月
三日より婦女これを食す 搗て作る薬 搗て作る餅
云て菓子とす 冐麺餅と用ひ又云ふ冐麺と

用ひ云て丈を周ひ者りしまや又錦繍百紙
ふいるを周ひ遠ふれは或人草餅を作りて遠
王ふ生ふ遠ふ云ふれは味の美なることを載して云
解弥栖なり家廟に献せ廟乃世大ふ治り遠ふ
古年と敬べしといふ倩人此事と知仏く后
三月ふ草餅を作り祖霊にたむ者解のなこり也
よりたべまれりとゆん古ふ者ふ伝たりかるか
所を見ふ遠ふ遠ふ云ふ錦繍百紙の如くいふて作ふて菓
事とすべきなり中古わたく淋舎乃伝なり
伝どうれ中秀歳時紀の伝と云ふ云ふ

とのむ事月令廣義に法美生を引いていはく三月桃花を採て陰干にしてのめば病を除き邪を祛ひ
たをうるおひとなん桃花を酒に浸さがひくの者と
用へし桃葉乃花と服もれい鼻血いとやまひと
事なり乃えをり
○ちなうこれ俗節に考妣先祖乃神を祭る供食
とをもむる神あり世間乃人ともかくすべき事か
をり俗節に元日乃朝上巳端午星夕中元重陽等
乃類なりこれ世俗の貴する所にてとのくるに拠
時食ものく奢侈し宴楽ひたるを考妣先祖よりの

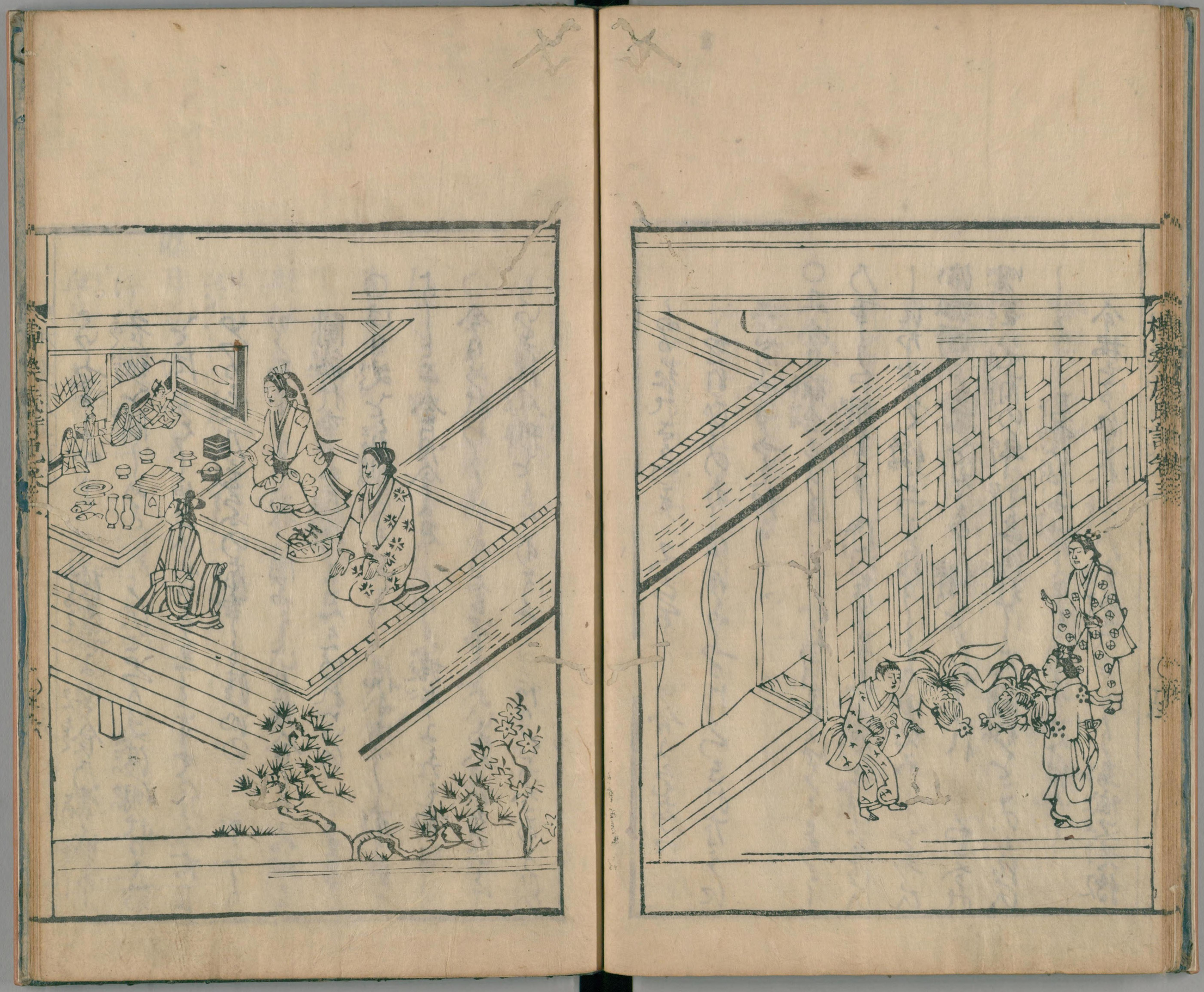
ざるいんなることろひとつ豈死に事乃事生に事乃
りまくこれ事なりてあくに事ろうてくもろ乃さなん
や前和いを用れ果蔬等の類也時食くい上巳の
草餅端午乃粽中元乃蓮羹重陽の菊酒等
俗の類なり毛と驚よりて亟前に海へし貴
和に雑煮とをもむる神れこと
○ひあへい今日曲水乃宴をなひを川乃上に遊遥
し被禊ちく流水に觴とうべろれ桃の葉を色
ざるれに猪と俗とくそのを桃と元酒とうけく飲
なる事なり羽觴と義すなどいろはすあるへし

繞春潭花はいとく晋乃武帝高書摯虞に問く
とく三日の曲水を義のとり物や摯虞對ていく
漢武帝乃財平原に徐肇三月初といく三人
乃女とまつりて三人ともに小形ゝぬ一村
のくいとく怪としてこれを漢に撰搖く盥洗
しゝ遂て流水に書とうべてこれとのむ妙あり宴
きよ起まり帝のいとく山陰のこくゝ行事
にはいとす尚書郎東晳こまとゆくいとく摯虞
小とをんごこれとをとんやむゝ周ロトきく漢
邑とふゝ流水に周く庖とうぶあよ遂ゆいく

羽觴浮波又奉れ服五三月上巳墨湯の如く金人
てゆ面より出水ん剱と指くいとく金人制首面
及秦乃覇彼侯因西三月曲水前漢後漢ともり
お沼くこれ盛事こに帝乃いとく善金ゆ行と
東晳ひ孤ひ摯虞と左遷きく陽城乃金とせり
きるん志くれとも東晳り書とを又一村の附金行ゆ
行とるにあらに又風土記ゆを後漢の郭虞の事
とあげたりしのとも後漢書殊傳志に三月上巳民
益禊于東流水上とゆ行とで漢れけとでよこれる
ゆり郭虞と始くとをあるびこに鄭乃國の俗

三月三日乃日蘭とあるに菊と祥と被潔とあり
詩経に鄭風に乃之菖蒲を浸酒とあり
作れども始久しき事なるべし　蕭穎士禊飲序
句蘭香を隔て氣を敷き握芳蘭臨清川　乘和飄潔用徹分社会義深
矣況文辞事会三月宴序云　厠飲古稽也
歌　胡ゆく蛙水乃家とけるる事那ゆふ天賀ゆ
御字より始れりとぞ　國ふも曲あ
乃家の行宮ぞ　ゆ
雅楽会編ゆ日本三百人を史作えたるや
新後撰ゆ定家卿の妻乃哥
ゆとりなくまやあ
ゆとりなくまやあ　ひ乃をりい水ゆなれ

あり新ゆさくつ　又ゆ
ゆ行ひのあ紙はあゆ行きゆなに
ゆとりゆ
○又今日鶏合をとるゆ世張門答ゆをくをろこ
乃事ゆ明皇ゆ御門たゆ鶏と闘ゆ
しゆ乃ゆ作ゆ
海鶏場と云ゆを
明皇八元角の年ゆ
ゆ　事蹟ゆ作ゆ
今按ゆこれ唐乃事ゆ



国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

とて書よせてより西塔宝典よりを食乃第城市
名鄙と聞しめ〻驚しをとりて又濃州明日を銘
とたく〻て先てあらまをてすを作り方よ
とて扇乃意の事の友事も清水の日九事なり
かゝる事まて我 国ゆをしの日鎌倉をとゆゆを
關鄙九事也たゝ俗よ見えられいて（より）
○十日丈と云紙をゝ所ゆ作りて第一周て
よりと平金月今よ見てゝり又壱年ゝ丈をすあり
○今日九わゝものあいあ事よひあるなりてひて
ちいさな人形とりてあるあるあるなりあるあるびの

事を源氏物語なりを見て作れいなみ（より）
しるなり又源氏よ十よなりぬる人いひあれて
ひいなを作るものとあ是十ちらしてと多
事なり又遠おくなる人形ふ衣服とぬの
てこを第なをこれとりてあをふるなり
源氏よ見てなりあまるついひすあるく
作りおよりあまりいハ事まてこれと事のもるの
ゆをとこれよ多とるゝ事なりあり

晦日 法居 今日と三月也とゝ中ゝ書い濁鄙の時
けて天寿融ゝよ茅木新まし新嘗越開人の
無気を和暢をとゝのあれハ花貴逆して元ゝ人五

〈うぐひす〉とさへづるはなぶで郭公よ
おもひそめ小雪陳して新光と鶯し春といと
角一後撰集に元河内躬恒の哥
くれてゆく春のなごりをおしみかね
ふかき山べの花ぞ咲ける　西行集に二月晦日
春をすごしかねてあるべき春とてやや
をしみつるかな　又おなじ歌の哥よ
紀友則の哥に春にあてもきまのこゝろ
をよらぬもうらめしき

賀島の三月晦日題劉禹錫詩よ

三月晦日　三十日風光別我苦吟見其元今夜不
須聞未可晴鐘報是春
清明　二月の末より二日前八日と定食とて此日まつこゝみハ毎
年紙の墓所と掃除し給ふとなり
これ　〈〉人風俗ものがたりに
金ゝ二十月朔日展墓名所可為春末初花盛也
古紙に志ある人ハ此日紙を八墓所へ掃す
〈〉事よ〈〉
此月親戚及交友と賞ず人〈〉元寿と賞とる事ハ
て厚と人〈〉豊約ろ可に南り人〈〉人〈〉

客と共敬して盞をとり酒を酌て強と共に酒をすゝめ又酒を酌て
先祖の霊屋に供し親戚男女と食をとる酒宴
と振ぐ演楽を強しむ人情の通ずる所宜と
敬ふ美味を調ひ已して供ふ
酒肴菓子などを可有
三月天氣よく日和しかるべき
と俗語に或茅屋と板屋と蓬蒿と
三月潮風宜しく海藻を刈
四月菜蕗花多菜芽を摘
五月菖蒲花多菜芽を摘

初又は中旬より之を
苟瓜蜀黍玉蜀黍蕎麦
豆赤小豆加豆胡麻薑眉豆黍百代草蕎麦
荊芥香薷など
五月の中より初て
やりくうのゆ
まをかりうのゆ
しらやそれぞれ
うのゆ
なるゝ
初又は中旬
苟瓜蜀黍玉蜀黍蕎麦
豆赤小豆加豆胡麻薑眉豆黍百代草蕎麦
荊芥香薷など
五月の
五月の
やりくうのゆ
まをかりうのゆ
しらやそれぞれ
うのゆ
なるゝ

清明の後は接てより月令廣義に見えたり
まうさ蕨とえむて厥とうまぜ日に干きいめく
かいり厥を洗ひて又日にほし收置べし食とる時
湯よりひたしやうぎ用ゆ或ひく煮て用ゆ也
新書の説なり或姫淹にして筆へ姫蕨は乾蕨
まうれいうんとなる姫蕨は用やすし干蕨也
野くさく傷に用ひくし又蕨と狗脊と姫淹の
九種の中に是は清明の後七十五日と朝とりて
蕨姫と書に見て俗世都鄙の人ひとへに桜花を
愛する故に七十日と云く蕨は此中

なるまで三月の後七十五日と云く花候とす年
の寒暖により早晩ありとこそ遅速は
こそたやすたがひ考良京都の桜は桜もひやへ
桜は十日あまり早く興ぶるこの上に平地
より花候なるべきと車一旬二旬或一月也
仏教に桜は法華経に
色仏教なるべきやうなく教る旨桜
沈月小蒜及雞子と食べ又魚獸の肉と食
車なるべし生薤獐麻肉と食べると煩疫とて
瘡毒熱病と成べし雞と食べば祟と成す月令廣義事
長義去に出

839
7
87

強き人のうつくしきと教とするをくして遠小性の人を
きく事命と延しむ百年のん業紀業と会すなる
面醫と会く化せざれば寒疾を為す
三月乃古候第一桃始開第二田鼠化為鴽第三虹始
見　右清明の三候なり第四萍始生第五鳴鳩拂
其羽第六桃始笑　右穀雨の三候なり
清明の日五十二刻十分穀雨の日五十七刻五十分穀雨の
日五十四刻十分穀雨五十五刻五十分　月令廣義

日本歳時記卷之二畢

839
7
87

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用